高齢期の性的マイノリティ（LGBT）に関する アイデンティティ発達研究の概観
－欧米諸国における実証研究のスコーピングレビュー－

上田　裕也

1. 問題と目的

近年、性的マイノリティに対する社会的関心が高まり、わが国でもその存在や課題が徐々に認識されて心理的支援の必要性が指摘されているが（葛西，2023）、なかでも性的マイノリティの高齢期についてはわが国では実証研究はほとんど見当たらない（田中，2020）。海外においても高齢期の性的マイノリティに関する実証的研究は他の発達段階に比べると少なく、研究の必要性が指摘されている（Institute of Medicine, 2010, Kimmel, 2014）。性的マイノリティであると自認する高齢者は、例えば米国では現在推定 270 万人おり、今後世界的に人口高齢化が進展する中、2060 年までに倍増すると予測されている（Fredriksen-Goldsen & Kim, 2017）。

性的マイノリティとは

一般に多数派である性的マジョリティは「異性愛者かつ出生時に割り当てられた性別と性自認が一致している者」であるのに対し、性的マイノリティとは、性的マジョリティではない人の総称、すなわち「出生時に割り当てられた性別、性自認、性的指向の 3 つの組合せに関するマイノリティ」（石丸, 2022）を指す。性自認（gender identity）とは、本人が主観的に実感している性別のことで、出生時に割り当てられた性別と性自認が一致している場合はシスジェンダー（cisgender）、一致しておらず出生時に割り当てられた性別とは異なる性別を自認している場合はトランスジェンダー（transgender）、男女という性別二元論（gender binary）ではない無性というあり方の X ジェンダー（X gender）やノンバイナリー（nonbinary）、両性というあり方のバイジェンダー（bigender）があり、これら出生時に割り当てられた性別と性自認との組合せのマイノリティをジェンダー・マイノリティ（gender minority）と呼ぶ。次に、性的指向（sexual orientation）とは、性的魅力や恋愛感情をどの性別に対して感じるかという方向性のことで、異性愛、同性愛（男性の場合はゲイ[gay]、女性の場合はレズビアン[lesbian]）、男女両性に対して感じる両性愛（バイセクシュアル[bisexual]）、性愛や恋愛の感情を他者に抱かない無性愛（エイセクシュアル。アセクシュアルともいう[asexual]）、対象を男女に分けて考えない全性愛（パンセクシュアル[pansexual]）がある。これら性自認と性的指向の組合せのマイノリティをセクシュアル・マイノリティ（sexual minority）と呼ぶ。以上のジェンダー・マイノリティとセクシュアル・マイノリティの 2 種を総称し性的マイノリティと呼んでいる（石丸, 2022）。最近では、同性に対して性的指向を持っていたり同性と関係を持ったりする人を指すクィア（queer）、自

分の性のあり方を決めない人や探している人を指すクエスチョニング（questioning）をQとし、これら以外にもさらに多様な人がいることを示す+を付し LGBTQ+と呼ぶことも多い（葛西, 2023）。なお、インターセックス（intersex）とは「染色体や性腺もしくは解剖学的に体の性の発達が先天的に非典型的である状態」を指す性分化疾患、あるいは近年 DSDs（Differences of Sex Development）と呼ばれ身体の性のさまざまな発達を指すもので、出生時に割り当てられた性別、性自認、性的指向の3つの組合せに関するマイノリティである性的マイノリティには含まれないのが一般的である（ヨ，2019）。本稿ではこれら多様な性的マイノリティのうち、これまで比較的知られ、研究蓄積のあるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）を対象とする。

高齢期のマイノリティストレスと性的アイデンティティ

性的マイノリティは差別や偏見に慢性的にさらされるマイノリティ・ストレスにより、メンタルヘルスの問題を引き起こしやすい（Meyer, 2003）。高齢期の性的マイノリティは、うつ病の割合が一般人口より2〜3倍高く（Fredriksen-Goldsen et al., 2011）、高齢期のトランスジェンダー女性は自殺念慮の割合が50%を超える（D'Augelli & Grossman, 2001）。この理由として高齢期の性的マイノリティが置かれてきた時代背景の影響が指摘される（Institute of Medicine, 2010）。高齢期の性的マイノリティは、同性愛行為が性的逸脱あるいは刑事犯罪とされた時代のもとで育った。米国精神医学会は長らく同性愛を精神医学的障害と位置づけてきたが、1973年に精神疾患の診断基準であるDSM III-R（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders）から同性愛を削除した。WHO（世界保健機構）も1990年に国際疾病分類であるICD-10（International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems）から同性愛を削除した。高齢期の性的マイノリティのメンタルヘルスを左右する要因として、性的アイデンティティを肯定的に評価できればメンタルヘルスを良好に維持できる一方（Fredriksen-Goldsen et al., 2016）、性的アイデンティティを隠し続けることはメンタルヘルスの悪化と関連していることが指摘されている（Fredriksen-Goldsen et al., 2013; 2014）。心理臨床家は、性的マイノリティに対する心理臨床実践にあたり、このようなマイノリティ・ストレスへの配慮が求められる（APA, 2021）。

高齢期の性的アイデンティティ発達

欧米における性的マイノリティの心理臨床実践では、同性愛者のアイデンティティ発達モデルがしばしば援用されてきた（平田, 2014）。わが国においても、性的マイノリティのクライエントが直面している問題を適切にアセスメントしやすいことなどから、モデルの理解は心理臨床実践において有効であると考えられる（葛西, 2023）。よく知られているのはCass（1979, 1984）とTroiden（1979, 1989）による同性愛者モデルである。これらのモデルは概ね、自らの行動や関心が同性愛的であることに気づいて混乱し孤立感を感じるが、他の同性愛者と接触していく中で自身が同性愛者であることを徐々に受容し、同性愛者であることを肯定的に意味づけて自分のアイデンティティとして統合していくという過程を辿るが、この過程は主に性的な関心が高まる思春期や青年期に起こると考えられている（Martin et al., 2002）。これらモデルはEriksonのアイデンティティ発達モデルのように、一連の段階を順に経ていく段階モデルアプローチが

採られている。Erikson（1959/1973）は、青年期の課題であるアイデンティティの確立を重視した一方、「アイデンティティ形成そのものは青年期に始まるわけでも終わるわけでもなく生涯続く発達過程である」とも述べた。岡本（1994）はアイデンティティ生涯発達論の観点から、青年期に一旦確立したアイデンティティは、中年期および老年期に再び問い直され、螺旋式に成熟していくと指摘している。

この点、D'Augeli（1994）は性的マイノリティのアイデンティティについても社会や環境条件に応じて一生を通して変化すると指摘しているが、これまでの研究ではいずれも性的な関心が高まる思春期や青年期が主な対象で、高齢期はほとんど触れられていない（Floyd & Stein, 2002; Rosario et al., 2006; Savin-Williams & Diamond, 2000）。近年、中年期や高齢期になって性的マイノリティであることを自認したりカミングアウトするいわゆる「遅咲き」（late bloomer）と呼ばれる人にも目が向けられるようになってきた（Subhrajit, 2014）。こうした「遅咲き」を研究する上で、性的指向は時間とともに、あるいは社会状況によって揺らいだり変化したりする「性的指向の揺らぎ」（sexual fluidity）という概念が議論されている（Diamond, 2008）。高齢期の「遅咲き」の場合、他の性的マイノリティと関わることなく、偏見の強い社会の中で長期に亘って一人で葛藤してきているため、上記のモデルには当てはまらないことが多い。さらに、高齢期のライフレビューで多くの落胆や後悔を認めることは絶望につながるが、その傾向は青年期にアイデンティティをうまく形成できずに本来の自分に向き合わなかった遅咲きの高齢者に顕著に現れやすい（Kroger, 2002）。つまり、性的マイノリティにとって、青年期のアイデンティティ形成の影響は、高齢期になってからのアイデンティティにも影響を与えることが示唆される（Takahashi & Walker, 2019）。以上より、性的マイノリティのアイデンティティ発達研究は、青年期だけでなく高齢期も含めた人生全般に亘る研究が重要だと考えられる。

本稿では、高齢期を対象とした性的マイノリティに関するアイデンティティ発達の実証研究を概観する。これまで得られている知見を整理した上で、リサーチギャップ（今後の研究課題）を特定することを目的とし、スコーピングレビューを行った。本稿は、心理臨床実践における高齢期の性的マイノリティのクライエント理解に資するという意義があると考えられる。

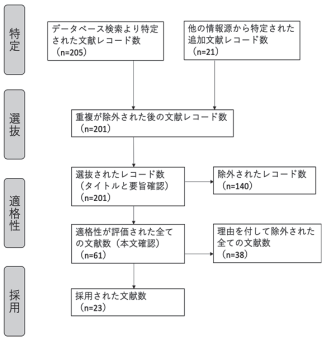
2. 方法

本稿では、スコーピングレビューのガイドライン（沖田ら, 2021; 友利ら, 2020）に則って海外文献を対象に同レビューを実施した。スコーピングレビューとは「幅広い文献を概観（マッピング）することで、現在行われている研究を網羅的に調査し、研究が行われていない範囲（リサーチギャップ）を明らかにすること」を目的とした比較的新しい文献レビューの手法である（沖田ら, 2021）。従来型のレビューはナラティブレビューと呼ばれ、文献検索やデータ抽出の方法は明確に規定されているわけではなく著者に一任されており、総論や解説記事などが相当する。次にシステマティックレビューと呼ばれるものは実施前に厳格なプロトコルを作成してデータベースに登録し、再現可能な形で文献の検索や選択を行い、個々の論文の質を評価し、最終的には得られた結果を統合して要約を作成するものである。これらに対してスコーピングレビューは、ナラティブレビューとシステマティックレビューの中間に位置し、事前にプロトコルを作成するがデータベースへの登録はなく、個々の論文の質の評価は任意で、幅広い知見

を素早くまとめ、網羅的に概観することが主な目的となる（友利ら, 2020）。本稿におけるリサーチクエスチョン（研究疑問）は「高齢期を対象とした性的マイノリティ（LGBT）のアイデンティティ発達の実証研究ではどのような研究がなされ、得られている知見は何か？」である。本稿では、性的マイノリティのうちこれまで比較的知られ、研究蓄積のあるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）を対象とした。高齢期は WHO と国連の定義に基づき 65 才以上とした。リサーチクエスチョン（研究疑問）作成のために設定する PCC（Population, Concept, Context）は、Population : 65 才以上の性的マイノリティ（LGBT）、Concept : アイデンティティ発達、Context : 指定なし（海外）とした。データベースは PubMed と Web of Science を用いた。ガイドラインに従い、まず「LGBT AND older adult AND identity」で検索（データベース検索）、次に検索された論文のタイトルや抄録のキーワードを分析してその他の語彙を含め検索（キーワード分析）、最後に論文の引用文献をもとに追加情報を検索（引用文献調査）する 3 段階で行った。PCC を幅広く包含し、人的・時間的制約内で実現可能な範囲での文献数がヒットするよう修正を重ね、最終的な検索式は「(gay[tiab] OR lesbian[tiab] OR bisexual[tiab] OR transgender[tiab] OR LGBT*[tiab] OR GLBT*[tiab] OR queer[tiab] OR homosexual*[tiab] OR “sexual minority”[tiab] OR “gender minority” [tiab]) AND (older[tiab] OR aging[tiab] OR ageing[tiab] OR aged[tiab] OR elder*[tiab] OR senior[tiab]) AND (“identity formation” [tiab] OR “identity development” [tiab]) 」を用いた（[tiab]はタイトルまたは抄録指定、*は変化指定）。最終検索日は 2023 年 11 月 8 日だった。文献選択にあたっては、妥当性担保のため臨床心理士・公認心理師資格を有する大学院生 1 名と実施し、意見の相違は協議して決定した。

3. 結果

レビュー対象となった 23 文献は、発行年は 1999〜2023 年、調査対象国は米国（18 件）、ベルギー（2 件）、ニュージーランド（1 件）、イタリア（1 件）、チェコ共和国（1 件）だった。調査対象の性的指向・性自認は T（4 件）、G（3 件）、LG（3 件）、GB（3 件）、LGB（3 件）、L（2 件）、B（2 件）、LGBT（2 件）、LGT（1 件）だった。研究法は量的研究（10 件）、質的研究（10 件）、量的・質的研究の混合法（2 件）だった。対象年齢は、65 才以上のみを対象とする文献は 2 件にとどまり、高齢期（older adults）を対象と謳う研究でも 50 才以上あるいは 60 才以上を対象とするものが多かった（13 件）。コホート研究の文献は 65 才以上が含まれていれば採用（11 件）した（図表 1、図表 2）。データ抽出の結果は文献要約表（図表 3）として掲載した。



図表 1　文献検索フローチャート

採用基準	除外基準
・65才以上を含む	・HIVのみを対象
・性的マイノリティ（LGBT）	・文学・歴史研究
・アイデンティティ発達	・レビュー、書籍、議事録
・実証研究	
・査読つき論文	
・英語	

図表 2　採用・除外基準

項番	著者、年	対象			デザイン、募集方法		研究目的、主な発見
1	Averett et al (2011)	L	年齢：51−86才 M=63.1	N=456 性的指向：91.3%レズビアン、3.7%バイ、2.7%ゲイ、2.7%その他 性別：女性 人種：86.9%白人、5.1%多人種、3.3%アフリカ系、1.5%ヒスパニック・ラテン系 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・LGBT団体へのメール等、スノーボール方式	目的：先行研究の少ない高齢のレズビアン女性の経験などを明らかにする。 女性に対する魅力を平均18才で自認し、その6.5年後に女性との真剣な交際を始めていた。91.5%が家族にカミングアウトしていた。60.5%以上が現在女性との関係を持ち、75%以上が健康と答えた。30%以上が性的指向に関する差別を受けた経験があった。
2	Bower et al (2021)	G	年齢：59−69才	N=9 性的指向：ゲイ 性別：男性 人種：不明 場所：米国	質的研究	・面接 ・高齢期LGBT団体へのメール、インターネット	目的：社会構造がアイデンティティ形成に与えた影響を明らかにする。 ゲイ男性が長年の社会変化を通じて自分の性的アイデンティティをどのように扱ってきたかを明らかにした。同性愛者の権利を求めて社会運動をしていたと語った者もいれば、人生の大半を沈黙と不可視の場所に追いやられたという経験を語った者もおり、個別性の理解が重要である。
3	Calzo et al (2011)	LGB	年齢：18−84才 M=49.31、SD=12.25	N=1,260 性的指向：73%ゲイまたはレズビアン、27%バイセクシュアル 性別：674人男性、586人女性 人種：83%白人、8%ヒスパニック、5%黒人、3%アジア系または太平洋諸島出身 場所：米国カリフォルニア州	量的研究（コホート）	・電話面接 ・州の健康調査	目的：マイルストン研究におけるコホートの影響を明らかにする。 (1)初めて同性に性的に惹かれた年齢、(2)初めてLGBと自認した年齢、(3)初めて同性と性的経験をした年齢、(4)初めてカミングアウトした年齢、の4つの指標について調査したところ、概ね思春期に経験していることが多く、コホート効果は少ない。他方、少数ではあるが30代以降に経験している者もいた。
4	Dakin et al (2022)	LGT	年齢：60−88才	N=11 性的指向：3人ゲイ、8人レズビアン 性別・性自認：10人シスジェンダー、1人トランスジェンダー 人種：白人 場所：米国アパラチア地域南部郊外	質的研究	・面接 ・高齢者施設募集、スノーボール方式	目的：農村部における高齢のLGTが宗教とどのように関与しているかを明らかにする。 高齢期のLGBTは、宗教信仰の中で成人期に偏見や差別の有害な経験があっても、それで宗教心が揺らぐことは少なく、自分を肯定的に歓迎してくれるコミュニティを見いだすよう動いていた。
5	Dhoest (2022)	GB	年齢：56−75才 M=62.5	N=16 性的指向：15人ゲイ、1人バイ 性別・性自認：男性 人種：白人（13人ベルギー人、3人オランダ人） 場所：ベルギー	質的研究	・オンライン面接 ・SNS	目的：高齢ゲイ・バイ男性の、過去と現在のアイデンティティや経験を明らかにする。 過去にはアイデンティティの受容など困難な経験をした。現在は取り巻く社会的文脈は改善したものの、差別や偏見は根強くなお自身のセクシュアリティの受容には困難がある。
6	Dhoest & Van Ouytsel (2022)	GB	年齢：（量的）18−77才，M=34.29，SD=13.41	（量的）N=684、うち71人=1964年以前生(Baby Boomers)，125人=1965−1980年生(Generation X)，315人=1981−1996年生(Millennials)，168人=1997−2012年生(Generation Z) （質的）N=80、うち16人=1964年以前生(Baby Boomers)，18人=1965−1980年生(Generation X)，24人=1981−1996年生(Millennials)，22人=1997−2012年生(Generation Z) 性的指向：80.8%ゲイ、5.7%バイ、13.5%その他 性別・性自認：男性 人種：85.8%ベルギー国籍、14.2%ベルギー国籍以外 場所：ベルギー	混合法（量的研究と質的研究）	・オンライン面接 ・SNS	目的：非異性愛者男性のアイデンティティ形成にとってのメディアの役割を世代別に明らかにする。 性的アイデンティティの探索の時期にはメディアが重要だった。デジタルメディアは若い世代にとってますます重要であり、高齢世代にとっても一定の役割を果たしている。
7	Fabbre (2014)	T	年齢：50−82才 12人=50−60才、7人=60−70才、2人=70−80才、1人=82才	N=22 性的指向：不明 性別・性自認：MTFトランスジェンダー 人種：18人欧州系、3人アフリカ系、1人アジア系 場所：米国シカゴ	質的研究	・面接 ・チラシ、スノーボール方式	目的：人生後半に性別移行を行うトランスジェンダーの経験を明らかにする。 過去の時間を社会期待に応えるために他者に捧げてきた時間、残された時間を本来の自分を取り戻す時間と捉えており、時間の認識がアイデンティティの感覚の重要な要素であることを指摘している。アイデンティティ発達は、多面的で安定性も予測可能性もない方法で行われる。
8	Fabbre (2015)	T	年齢：50−82才 12人=50−60才、7人=60−70才、2人=70−80才、1人=82才	N=22 性的指向：不明 性別・性自認：MTFトランスジェンダー 人種：18人欧州系、3人アフリカ系、1人アジア系 場所：米国シカゴ	質的研究	・面接 ・チラシ、スノーボール方式	目的：人生後半に性別移行を行うトランスジェンダーの経験を明らかにする。 過去の長年の苦悩の経験を受け入れ、人生後半で自分の本当の感覚を優先し新たにアイデンティティを形成していく過程が見出された。
9	Floyd & Bakeman (2006)	LGB	年齢：18−74才 男性M=36、女性M=33	N=767 性的指向：93%レズビアンまたはゲイ、7%バイセクシュアル 性別：54%男性、46%女性 人種：76%欧州系白人、11%アフリカ系黒人、13%その他 場所：米国アトランタ	量的研究（コホート）	・質問紙 ・プライドイベントの出展ブース	目的：マイルストンと歴史的背景の関連を明らかにする。 若年コホートは、カミングアウトの早期化、同性との性行為を試す前に性的指向を自認していること、異性間の初めての性的経験が早期化していることが示唆された。高齢コホートは、人生の後半でカミングアウトすると報告する可能性が高くなる。
10	Fredriksen-Goldsen et al (2017)	LGBT	年齢：50−80才以上 70%=50−64才、27%=65−79才、3%=80才以上	N=2,450 性的指向：30%レズビアン、40%ゲイ、17%バイセクシュアル 性別・性自認：17%トランスジェンダー 人種：78%白人、9%黒人、9%ヒスパニック、43%その他 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・全国縦断調査	目的：健康、幸福とライフイベントとの関係を明らかにする。 潜在プロファイル分析を用いて、アイデンティティ発達、仕事、親族、健康などに関連するライフイベントを特定し、リソースの多い者やリスクにさらされている者など4つのクラスターに分類した。
11	Fredriksen-Goldsen et al (2022a)	B	年齢：50−80才以上 M=61 112人=50−64才、91人=65−79才、13人=80才以上	N=216 性的指向：バイセクシュアル 性別・性自認：97人男性、103人女性、16人その他人種：74%白人 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・全国縦断調査	目的：高齢のバイセクシュアルのライフコースを明らかにする。 80才以上の世代は、50−70代世代と比較して、カミングアウトの割合が最も低く、偏見差別を受けた経験が少なく、健康度合いが高いことが示唆される。バイセクシャルの男性は、バイセクシャルの女性よりも偏見差別を受けた経験が多く、社会的資源が少ない。
12	Fredriksen-Goldsen et al (2022b)	T	年齢：50−80才以上 M=59.9 130人=50−64才、65人=65−79才、10人=80才以上	N=205 性的指向：23%ゲイ・レズビアン、32%バイ、12%ヘテロ、33%その他 性別・性自認：トランスジェンダー、54人男性、91人女性、60人ノンバイナリー 人種：67%白人、13%ヒスパニック、9%黒人、7.4%多人種 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・全国縦断調査	目的：高齢のトランスジェンダーのライフコースを明らかにする。 80才以上の世代は、子どもを持ち、コミュニティに参加している割合が多い。60−70代世代は差別経験の割合が高く、同性婚は少なく、異性婚が多い。

図表 3　文献要約表

項番	著者、年	対象			デザイン、募集方法		研究目的、主な発見
13	Fredriksen-Goldsen et al (2023)	LG	年齢：50-80才以上 M=61.56,SD=0.28 894人=50-64才、1011人=65-79才、174人=80才以上	N=2079 性的指向：838人レズビアン、1241人ゲイ 性別・性自認：レズビアンのうち3.9%トランスジェンダー／ノンバイナリー、ゲイのうち2%トランスジェンダー／ノンバイナリー 人種：80%白人 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・全国縦断調査	目的：高齢のゲイ・レズビアンのライフコースを明らかにする。 80才以上の世代の多くは、高齢になってから自分のアイデンティティを明らかにし、パートナーの死を経験している。50-60代の世代の多くは自分のアイデンティティを早期に明らかにしていたが、差別の経験が多かった。
14	Grov et al (2018)	GB	年齢：19-80才 14%=19-25才、28%=26-35才、20%=36-45才、19%=46-55才、20%=56-80才	N=1,023 性的指向：95%ゲイ、5%バイセクシュアル 性別：男性 人種：71%白人、13%ラテン系、8%黒人、8%その他 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・全国縦断調査	目的：最新のデータを用いて、マイルストンへのコホートの影響を明らかにする。 出生コホートは、男性が同性に最初に性的魅力を感じた時期とは無関係（年齢中央値は11～12歳）だが、その年齢を除けば、高齢のコホートは若年のコホートよりも遅い年齢でアイデンティティ発達の指標となる出来事を通過する傾向があった。
15	Jen (2021)	B	年齢：60-77才 M=65	N=12 性的指向：バイセクシュアル 性別：女性 人種：9人白人、2人黒人、1人アジア人 場所：米国太平洋岸北西部	質的研究	・面接 ・チラシ、オンライン、スノーボール方式	目的：高齢のバイセクシュアル女性のライフコースを明らかにする。 バイセクシュアル女性は、バイセクシュアルという性的指向について幼少期から20代までに早期に自認する人と30代以降の人生半ば以降に自認する人という2つのグループがあった。早期に自認する人は、女性の生物学的特徴に惹かれているのに対し、人生半ば以降に自認する人は社会関係の中で女性に惹かれていた。
16	Marhankova (2019)	LGB	年齢：50-70才	N=19 性的指向：15人ゲイ、2人レズビアン、2人バイセクシュアル 性別：不明 人種：不明 場所：チェコ共和国	質的研究	・面接 ・チラシ、オンライン、スノーボール方式	目的：高齢LGBのカミングアウト経験について明らかにする。 退職、親との死別、子の独立などはカミングアウトへの障壁を取り除いた出来事だった。逆に、将来介護サービスを受けるなどの状況に直面すると、カミングアウトの障壁となり再び隠さざるを得ないと考えている。
17	Neville et al (2015)	G	年齢：65-81才	N=12 性的指向：ゲイ 性別：男性 人種：不明 場所：ニュージーランド	質的研究	・面接 ・高齢期ゲイ男性向けイベントで募集	目的：高齢ゲイ男性のカミングアウトの経験を明らかにする。 65歳以上の同性愛者男性は、同性への魅力や行為が犯罪である時代に育った。高齢期の同性愛者の男性の多くは、同性愛を否定し、カミングアウトする前に結婚して子供をもうけるなど同性愛者にならないようにする努力をし、最後には受容するという経験をしていた。
18	Parks (1999)	L	年齢：23-79才 うち11人=45-79才	N=31 性的指向：レズビアン 性別：女性 人種：白人 場所：米国ペンシルベニア州の都市・郊外	質的研究	・面接 ・募集、スノーボール方式	目的：レズビアンのアイデンティティ発達の経験を明らかにする。 家族や友人の間で、セクシュアリティについて話されることすらない静寂の時代に育ち、男性と付き合うのが当然という時代に、何か周囲と違うという違和感が一体何なのかを知る手がかりもモデルも情報もなかった。自身が経験する馴染みのない感情や衝動を探索し名づける方法を1人で孤独に行わなければならなかった。
19	Puckett et al (2022)	T	年齢：16-73才 M=25.52, SD=9.68	N=695、うち27人=1964年以前生(Boomers)、55人=1965-1980年生(Generation X)、415人= 1981-1996年生(Millennials)、196人= 1997-2012年生(Generation Z) 性的指向：25%クィア、19%パンセクシュアル、14%アセクシュアル、9%ゲイ、6%ヘテロ、5%レズビアン 性別・性自認：トランスジェンダー、534人出生時女性割当て、156人出生時男性割当て 人種：76%白人、14%多人種、4%ラテン系、3%アジア系、2%黒人 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・SNS、チラシ	目的：トランスジェンダーの経験するマイルストンは、ジェンダー間、世代間でどのように異なるかを明らかにする。 トランス女性は、他のジェンダーよりも、肯定したジェンダーで生き、医療ケアを受ける年齢が遅かった。60代以上は、他の年代よりも、マイルストンを遅い年齢で経験していた。若い世代は、高齢世代よりも、内面化されたスティグマ、不安、抑うつのレベルが高かった。
20	Rosati et al (2020)	LGBT	年齢：20-80才 M=41.15、 SD=16.13	N=266 性的指向：44%ゲイ、39%レズビアン、9%バイセクシュアル、8%クイア・パンセクシュアル・流動的 性別・性自認：46%男性、47%女性、6%トランスジェンダー・ノンバイナリー／ジェンダークイア 人種：95%白人、3%ヒスパニック、2%アジア人 場所：イタリアのカトリック教徒	量的研究（コホート）	・オンライン ・LGBT施設でのチラシ、オンライン、スノーボール方式	目的：カトリックの背景でのカミングアウト経験を明らかにする。 高齢者は他の年代よりも遅い年齢で自分の性的アイデンティティを認識しカミングアウトをしていた。高齢者は他の年代よりカトリック教徒が多く、宗教コミュニティに対しても多くがカミングアウトをしていた。コミュニティの反応は、無条件の受け入れ、変化への誘導、あからさまな拒絶の3タイプに区別された。
21	Rosenfeld (1999)	LG	年齢：65-89才 M=72.5、うち40%=75才以上	N=37 性的指向：54%レズビアン、46%ゲイ 性別：46%男性、54%女性 人種：3人アフリカ系、3人ラテン系、4人海外出身（独、加、アルゼンチン） 場所：米国ロサンゼルス	質的研究	・面接 ・募集、スノーボール方式	目的：ライフコースの観点から、高齢のゲイ・レズビアンのアイデンティティ発達の経験を明らかにする。 同じ社会的歴史的背景を生きた同じコホートの人々は、その影響を受けながらアイデンティティを発達させてきた。
22	Tornello & Patterson (2015)	G	年齢：25-84才 M=48、SD=9.8	N=739、うち60才以上=94人 性的指向：ゲイ 性別：男性 人種：91.3%白人、3.8%ヒスパニック・ラテン系、1.9%多人種、1.2%アフリカ系、0.9%アジア系 場所：米国	量的研究（コホート）	・オンライン ・LGBT団体ニュースレター、ウェブサイト、メール	目的：ゲイ男性が父親になることについて、世代間の差異を明らかにする。 50歳以上のほとんどが異性愛関係の元で父親になったが、若い男性では少数だった。一方、若い男性の大部分は、同性関係のもとで養子や里親などで父親になった。若い世代でも異性愛関係の元で父親になることはあり、世代交代はなお進行中である。
23	Weststrate & McLean (2010)	LG	年齢：18-74才 M=31.69、 SD=11.94	N=251 性的指向：ゲイまたはレズビアン 性別：156人男性、86人女性、9人不明 人種：152人白人、35人非白人、64人不明 場所：米国	混合法（量的研究と質的研究）（コホート）	・オンライン ・インターネット、スノーボール方式	目的：セクシャリティに影響を与えた出来事や経験を明らかにする。 高齢者はアイデンティティ形成に重要だった出来事として、若い世代が個人的な記憶を報告するのに比べて政治的な出来事のナラティブが多かった。自己定義的な記憶については、高齢者は性行為など主に１つの個人的な出来事を報告したが、若い世代は複数の出来事を報告した。

図表３　文献要約表（続き）

ライフコースの観点に基づく量的・質的研究

高齢期を対象とする今回のレビューでは、社会文化的・歴史的文脈が個人の発達に重要な影響を与えるというライフコースの観点を踏まえた研究が多かった。ライフコースとは個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列を意味し、サンプリングにおいては対象者の歴史的な文脈を捉えるために、一定の暦年時間においてある出来事を経験した人の集団、つまり出生コホートという考え方を用いる。ライフコース研究では、大規模な対象者を扱い量的手法に基づいて法則定立的な立場に立つ一方で、面接に基づいた質的手法を用いられることもある（Elder, 1998/2003）。

量的研究では、Fredriksen-Goldsen ら（2022a, 2022b, 2023）が大規模な全米データをもとに、高齢期の性的マイノリティを、①社会的に存在が認知されていなかった時代に青年期を過ごした 80 才以上の世代（1934 年以前生まれ）、②同性愛が治療対象として攻撃された時代に青年期を過ごした 65-79 才（1935-1949 年生まれ）、③解放運動を青年期に経験した 50-64 才（1950-1964 年生まれ）という歴史的文脈の異なる 3 つの出生コホートに分類して分析した。その結果、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーいずれも、①80 才以上はカミングアウトが遅いため差別を受けた経験は少ない、②65-79 才は青年期に最も差別の厳しい時代を経験したためカモフラージュによる異性婚が多い、③50-64 才はカミングアウトが早いため差別を受けた経験が多いという特徴があった。また、同じデータを用いて対象者を特徴別にクラスターに分類した潜在プロファイル分析によれば（Fredriksen-Goldsen et al., 2017）、40 代半ばで性的アイデンティティを自認する者もおり、それは女性やトランスジェンダーに多く、結婚し子どももいることが多かった。仕事で差別を受けて失業や貧困を経験し、さらに家族のサポートも少ない者はメンタルヘルスがリスクに晒される一方、職業が安定してパートナーがおり、仕事でもあまり差別を経験せず受容的な経験の多い者はメンタルヘルスが良好だった。

次に、質的研究をみると、知られていないことの多い高齢期の性的マイノリティのライフコースについて、人生を振り返り経験を回想してもらう研究が多くみられた。若い頃に自身が同性愛者であると気付いて情報のない中で孤独に自己に向き合った経験、異性愛規範社会に適応しようと異性婚をしたものの失敗した経験、差別を受けた経験などが多く語られていた（e.g. Bower et al., 2021; Manhankova et al., 2019; Neville et al., 2015; Parks, 1999）。バイセクシュアル女性やトランスジェンダーからは、30 代半ばに自認したり、人生の後半に自らを受容し新たなアイデンティティを形成していく過程などが語られた（e.g. Fabbre, 2014; 2015; Jen, 2021）。多くの研究が回想的な語りを中心に扱うなか、現在の経験について問う研究では、過去に比べて現在は性的マイノリティを取り巻く状況が改善しているものの、依然として偏見や差別による困難が存在することが語られた（Dhoest, 2022）。

出生コホートを用いた性的アイデンティティ発達のマイルストン研究

Cass や Troiden の同性愛者アイデンティティ発達モデルは、その後、直線的かつ段階的に経験されると仮定することについてその妥当性が批判され、代わって、発達上の重要な出来事であるマイルストンの経験年齢やその背景を調査することで多様なパターンやその要因を検討しようとする研究が増えてきた（Dirkes et al., 2016）。マイルストン項目は、①初めて同性に対し

て性的に惹かれた年齢、②初めて性的マイノリティだと自認した年齢、③初めて同性と性的経験をした年齢、④初めてカミングアウトした年齢などが調査されることが多い（e.g. Calzo et al., 2012; Grov et al.,2018）。出生コホートを用いて世代比較を行った研究では、①初めて同性に性的に惹かれた年齢は、いずれの世代も思春期に通過しており、時代背景や世代の影響が少なくコホート効果は小さかった（Calzo et al., 2012; Floyd & Bakeman, 2006; Grov et al., 2018）。他方、②〜④のマイルストンは、高齢コホートは若年コホートより遅い年齢で通過する傾向があった。これは多様性に不寛容だった時代背景において、同性愛嫌悪による自認の躊躇やカミングアウトの困難さがあったと考えられる（Floyd & Bakeman, 2006）。さらに、少数ではあるが自認やカミングアウトの年齢が 30〜40 代と大幅に遅延する例もみられ、性的指向アイデンティティ発達には大きな個人差があることが示唆された（Calzo et al., 2012; Grov et al., 2018）。

これに対し、まだ研究は少ないが、性自認（ジェンダー）アイデンティティ発達のマイルストン研究も行われている（Puckett et al., 2022）。ここでのマイルストン項目は、①初めて自分の性に違和感を感じた年齢、②初めてトランスジェンダーだと自認した年齢、③トランスジェンダーとして部分的に生活を送り始めた年齢、④トランスジェンダーとしてフルタイムで生活を送り始めた年齢、⑤何らかのジェンダーに関する医療的肯定を受けた年齢などが調査されている。性自認アイデンティティ発達では、いずれのマイルストンも、高齢コホートが若年コホートより通過年齢が遅い傾向があった。

4. 考察と今後の課題

対象文献の地域的偏り

本稿のレビューでは、対象全てが欧米諸国の文献となり、地域的偏りが見られた。中でも米国が半数以上を占めて偏った理由の 1 つとして、米国では現在、連邦政府レベルで性的マイノリティを健康格差のあるリスク群として取り上げ、公衆衛生上の優先事項として情報収集を行なっていくこととされており、研究が活発に進められていることなどが考えられる（U.S. Department of Health and Human Services [DHHS], 2012）。また、研究目的のために高齢期の性的マイノリティへアクセスすることはその不可視性から困難が多いとされるが、老年学の分野では欧米、特に米国では、歴史はまだ浅いながらも半世紀ほど蓄積があるため（Takahashi & Walker, 2019）、比較的研究を行いやすい環境が整っている可能性が高い。

今回得られた知見は、研究の行われた当該地域の社会文化的・歴史的文脈において限定された結果であり、高齢期の性的マイノリティの諸様相を捉えているわけではない。例えば、米国の歴史的文脈をみると、第 2 次世界大戦後は反共産主義によって同性愛が弾圧されたり、米国精神医学会によって同性愛が精神障害に位置付けられたりするなど性的マイノリティにとっては厳しい時代だった。1969 年には同性愛への取締りを強化する警察に抵抗したストーンウォール事件が起こり、それを契機にゲイ解放運動が盛り上がった。1980 年代には性的マイノリティの間で HIV/AIDS パンデミックが広がった。これらは一例だが米国特有の歴史であり、異なる歴史的文脈を持つわが国や他国にそのまま研究結果を適用できない点には留意が必要である。

性的アイデンティティ発達における偏見（スティグマ）の影響

高齢期のレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーのアイデンティティ発達における共通点としては、いずれも高齢コホートは偏見の強い時代に青年期を送ったため、若年コホートと比較すると自認やカミングアウトが遅れたことが挙げられる。他方、異なる点としては、性的マイノリティの中でも特にバイセクシュアルとトランスジェンダーはメンタルヘルスの問題を多く抱えていることが挙げられる。バイセクシュアルは、性的指向に混乱しているとか、性的に盛んで信用できないなどといった否定的なステレオタイプを持たれており（Zivony & Lobell, 2014）、同性愛者からもバイセクシュアルは異性愛者としての特権を維持しているという偏見を持たれていることが指摘されている（Udis-Kesseler, 1990）。このため、高齢期のバイセクシュアルは LGBTQ+コミュニティへの帰属意識を持ちにくいという報告がある（Erosheva et al., 2016）。トランスジェンダーは、隠しにくく目に見える特徴があるため、ゲイ、レズビアン、バイセクシュアルよりも多くの差別や偏見を経験しているとされる（Nagoshi et al., 2008）。このような特有の偏見（スティグマ）や誤ったステレオタイプの存在が、性的マイノリティ間でも発達上の差異を生じさせている可能性があると考えられる。

今後の課題（リサーチギャップ）

以上のレビューの結果から、以下のリサーチギャップが明らかになった。

第 1 に、調査対象のサンプリングに偏りが見られた。上述した国・地域の偏りのほか、調査対象者には白人、一定の収入を有する者、高学歴などが多かった。今後は、国・地域、人種、収入、学歴、宗教、障害などさらなる多様性を捉えた研究が求められる。高齢期かつ性的マイノリティという組合せにとどまらず、さまざまな属性が交差する多様性は、近年、交差性（intersectionality）という概念でも注目されている（Russel & Horn, 2017）。今回の対象文献の中でも交差性への言及が複数見られた（e.g. Bower et al. 2021; Fredriksen-Goldsen et al., 2022a）。交差性は、米国心理学会による性的マイノリティに対する心理臨床のガイドラインにおいてもその理解の重要性が指摘されている（APA, 2021）。

第 2 に、高齢期におけるアイデンティティ発達過程そのものを対象とした研究が少なかった。今回の対象文献では、高齢期の性的マイノリティが自身の青年期や成人期を振り返り、性的アイデンティティ発達の指標となるマイルストンをいつどのように経験したかを回想するものが大半だった。アイデンティティは一生を通じて変化するという考え方に立つと、高齢期においても当然発達し続けていると予想されるが、高齢期にはどのような変化が生じうるのか、どのような段階がありうるかといった研究はみられなかった。高齢期の性的マイノリティは現在どのような生活を送り、それが性的アイデンティティの発達にどのような影響を与えているかもなお不明な点が多い（Bower et al., 2021）。

第 3 に、心理臨床実践の観点から、メンタルヘルスの問題は多くの文献で指摘されていたものの、アイデンティティ発達過程におけるマイルストンを経験した際に、実際どのようなことを感じたり思ったりしたのか、またそうした感情や心の動きが性的アイデンティティ発達にどのような影響を与えたのかという、感情面や心的過程に関する言及はほとんどなかった。心理臨床場面においては、こうした知見はクライエント理解や心理的支援に資するものであり、重

要であると考えられる。

最後に、本稿の限界として、レビュー文献の選択範囲について英語の査読付き論文のみを対象とし、書籍の章や学会報告などの灰色文献を含んでいない。また、文献の検索範囲について演算子を変更すれば、今回の検索結果から外れた文献が浮上し、知見を取りこぼしている可能性があるほか、文献の選定においてバイアスが生じている可能性がある。以上の点は、今後の課題である。

引用文献

American Psychological Association. (2021). APA Guidelines for Psychological Practice with Sexual Minority Persons.

Averett, P., Yoon, I., & Jenkins, C.L. (2011). Older Lesbians: Experiences of Aging, Discrimination and Resilience. *Journal of Women & Aging*, **23**, 216-232.

Bower, K.L., Lewis, D.C., Bermudez, J.M., & Singh, A.A. (2021). Adding grey to the rainbow: a narrative analysis of generational identity through stories and counter-stories of older gay men. *Ageing & Society*, **41**(5), 957-979.

Calzo, J.P., Antonucci, T.C., Mays, V.M., & Cochran S.D. (2011). Retrospective Recall of Sexual Orientation Identity Development Among Gay, Lesbian, and Bisexual Adults. *Developmental Psychology*, **47**(6),1658-1673.

Cass, V. (1979). Homosexual identity formation; A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, **4**(3), 219-235.

Cass, V. (1984). Homosexual identity formation; Testing a theoretical model. *Journal of Sex Research*, **20**, 143-167.

Dakin, E., Levy, D.L., & Williams, K.A. (2022). Religious and spiritual journeys of LGBT older adults in rural Southern Appalachia. *Journal of Religion Spirituality & Aging*, **34**(4), 323-343.

D'Augeli, A.R. (1994). Lesbian and gay male development: Steps toward an analysis of lesbians' and gay men's lives. In B. Greene, & G. M. Herek (Eds.), Lesbians and gay psychology: Theory, research, and clinical applications (pp.118-132). Newbury Park, CA: Sage.

D'Augelli, A., & Grossman, A. (2001). Disclosure of sexual orientation, victimization, and mental health among lesbian, gay, and bisexual older adults. *Journal of Interpersonal Violence*, **16**(10), 1008-1027.

Dhoest, A. (2022). Then and Now: Formative Experiences and Generational Perspectives among Flemish GBTQ Baby Boomers. *Journal of Mens Health*, **18**(10), 1-9.

Dhoest, A., & Van Ouytsel, J. (2022). Queer media generations: Shifting identifications and media uses among non-heterosexual men. *European Journal of Communication*, **37**(6), 663-678.

Diamond, L.M. (2008). Female bisexuality from adolescence to adulthood: Results from a 10-year longitudinal study. *Developmental Psychology*, **44**, 5-14.

Dirkes, J., Hughes, T., Ramirez-Valles, J., Johnson, T., & Bostwick, W. (2016). Sexual identity development: relationship with lifetime suicidal ideation in sexual minority women. *Journal of Clinical Nursing*, **25**(23-24), 3545-3556.

Elder, H.Jr. & Janet, Z. Eds. (1998). Methods of life course research: Qualitative and quantitative approaches. Sage Publications. 正岡寛司・藤見順子 (訳) (2003). ライフコース研究の方法―質的ならびに量的アプローチ．明石書店.

Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性．誠信書房.

Erosheva, E.A., Kim, H.j., Emlet, C., & Fredriksen-Goldsen, K.I. (2016). Social networks of lesbian, gay, bisexual, and transgender older adults. *Research on Aging*, **38**(1), 98-123.

Fabbre, V.D. (2014). Gender transitions in later life: the significance of time in queer aging. *Journal of Gerontological Social Work*, **57**(2-4), 161–175.

Fabbre, V.D. (2015). Gender transitions in later life: a queer perspective on successful aging. *Gerontologist*, **55**(1), 144–153.

Floyd, F.J., & Bakeman, R. (2006). "Coming Out Across the Lifecourse: Implications of Age and Historical Context." *Archives of Sexual Behavior*, **35**, 287-296.

Floyd, F.J., & Stein, T.S. (2002). Sexual orientation identity formation among gay, lesbian, and bisexual youths: multiple patterns of milestone experiences. *Journal of Research on Adolescence*, **12**(2), 167-191.

Fredriksen-Goldsen, K.I., Kim, H.J., Emlet, C.A., Muraco, A., Erosheva, E.A., & Hoy-Ellis, C.P. (2011). The aging and health report: disparities and resilience among lesbian, gay, bisexual, and transgender older adults. Seattle: Institute for Multigenerational Health.

Fredriksen-Goldsen, K.I., Emlet, C.A., Kim, H.J., Muraco, A., Erosheva, E.A., Goldsen, J., & Hoy-Ellis, C.P. (2013). The physical and mental health of lesbian, gay male, and bisexual (LGB) older adults: The role of key health indicators and risk and protective factors. *The Gerontologist*, **53**, 664–675.

Fredriksen-Goldsen, K.I., Cook-Daniels, L., Kim, H.J., Erosheva, E.A., Emlet, C.A., Hoy-Ellis, C.P., & Muraco, A. (2014). Physical and mental health of transgender older adults: An at-risk and underserved population. *The Gerontologist*, **54**, 488–500.

Fredriksen-Goldsen, K.I., Shiu, C., Bryan, A.E.B., Goldsen, J., & Kim, H.J. (2016). Health equity and aging of bisexual older adults: Pathways of risk and resilience. *The Journal of Gerontology Series B, Psychological Sciences and Social Sciences*, **72**(3), 468–478.

Fredriksen-Goldsen, K.I., Bryan, A.E., Jen, S., Goldsen, J., Kim, H.J., & Muraco, A. (2017). The Unfolding of LGBT Lives: Key Events Associated With Health and Well-being in Later Life. *Gerontologist*, **57**(1), 15-29.

Fredriksen-Goldsen, K.I., & Kim, H.J. (2017) The science of conducting research with LGBT older adults –an introduction to Aging with Pride: National Health, Aging, and Sexuality/Gender Study (NHAS). *Gerontologist*, **57**(1), 1–14.

Fredriksen-Goldsen, K., Jen, S., Clark, T., Kim, H.J., Jung, H., & Goldsen, J. (2022a). Historical and generational forces in the Iridescent Life Course of bisexual women, men, and gender diverse older adults. *Sexualities*, **25**(1-2), 132-156.

Fredriksen-Goldsen, K., Emlet, C.A., Fabbre, V.D., Kim, H.J., Lerner, J., Jung, H.H., Vern Harner, V., & Goldsen, J. (2022b). Historical and social forces in the Iridescent Life Course: key life events and

experiences of transgender older adults. *Ageing & Society*, 1-23.

Fredriksen-Goldsen, K., Hoy-Ellis, C., Kim, H.J., Jung, H.H., Emlet, C.A., Johnson, I., & Goldsen, J. (2023). Generational and Social Forces in the Life Events and Experiences of Lesbian and Gay Midlife and Older Adults Across the Iridescent Life Course. *Journal of Aging and Health*, **35**(3-4), 265–281.

Grov, C., Rendina, H.J., & Parsons, J.T. (2018). Birth Cohort Differences in Sexual Identity Development Milestones Among HIV-Negative Gay and Bisexual Men in the United States. *Journal of Sex Research,* **55**(8), 984-994.

平田俊明 (2014). レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル支援のための基本知識. 針間克己・平田俊明(編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援. 岩崎学術出版社, pp.26-38.

Institute of Medicine. (2011). The health of lesbian, gay, bisexual, and transgender people: building a foundation for better understanding. Washington, DC: The National Academies Press.

石丸径一郎 (2022). LGBTQ+の生きづらさとメンタルヘルスの諸課題. 精神医学, **64**(8), 1069-1073.

Jen, S. (2021). "Hardwired" Biology and "Light Bulb" Moments: Divergent Lite Course Trajectories and Discourses among Older bisexual women. *Journal of Bisexuality*, **21**(4), 465-483.

葛西真記子 (2023). 心理支援者のための LGBTQ+ハンドブック―気づき・知識・スキルを得るために. 誠信書房.

Kimmel, D. (2014). Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Aging Concerns. *Clinical Gerontologist*, **37**, 49-63.

Kroger, J. (2002). Identity processes and contents through the years of late adulthood. *Identity: An International Journal of Theory and Research*, **2**(1), 81-99.

Marhankova, J.H. (2019). Places of (in)visibility. LGB aging and the (im)possibilities of coming out to others, *Journal of Aging Studies*, **48**, 9-16.

Martin, C. L., Ruble, D. N., & Szkrybalo, J. (2002). Cognitive theories of early gender development. *Psychological Bulletin*, **128**, 903–933.

Meyer, I.H. (2003). Prejudice, Social Stress, and Mental Health in Lesbian, Gay, and Bisexual Populations: Conceptual Issues and Research Evidence, *Psychological Bulletin*, **129**(5), 674-697.

Nagoshi, J.L., Adams, K.A., Ternell, H.K., Hill, E.D., Brzuzy, S., & Nagoshi, C.T. (2008). Gender differences in correlates of homophobia and transphobia. *Sex Roles*, **59**, 521-531.

Neville, S., Kushner, B., Adams, J. (2015). Coming out narratives of older gay men living in New Zealand. *Australasian Journal on Ageing*, **34**(2), 29–33.

岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.

沖田勇帆・廣瀬卓哉・長 志保・高瀬 駿・岸 優斗 (2021). JBI Manual For Evidence Synthesis: Scoping Reviews 2020. スコーピングレビューのための最新版ガイドライン(日本語訳). 日本臨床作業療法研究, **8**, 37-42.

Parks, C.A. (1999). “Lesbian Identity Development: An Examination of Differences Across Generations.” *American Journal of Orthopsychiatry*, **69**, 347-61.

Puckett, J.A., Tornello, S., Mustanski, B., & Newcomb, M.E. (2002). Gender Variations, Generational

Effects, and Mental Health of Transgender People in Relation to Timing and Status of Gender Identity Milestones. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, **9**(2), 165-178.

Rosario,M., Schrimshaw,E.W., Hunter,J., & Braun,L. (2006). Sexual identity development among lesbian, gay, and bisexual youths: Consistency and change over time. *Journal of Sex Research*, **43**,46-58.

Rosati, F., Pistella, J., Nappa, M.R., & Baiocco, R. (2020). The Coming-Out Process in Family, Social, and Religious Contexts Among Young, Middle, and Older Italian LGBQ plus Adults. *Frontiers in Psychology*, **11**.

Rosenfeld, D. (1999). Identity Work Among Lesbian and Gay Elderly. *Journal of Aging Studies,* **13**, 121-144.

Russel T.S. & Horn, S.S. (2017). Sexual Orientation, Gender Identity, and Schooling. The nexus of research, practice, and policy. Oxford University Press.

Savin-Williams, R.C., & Diamond, L.M. (2000). Sexual identity trajectories among sexual-minority youths: Gender comparisons. *Archives of Sexual Behavior*, **29**, 607-627.

Subhrajit, C. (2014). Problems Faced by LGBT People in Mainstream Society; Some Recommendations. *International Journal of Interdisciplinary and Multidisciplinary Studies*, **1**(5), 317-331.

Takahashi, M. & Walker, B. (2019). 性的マイノリティ（LGBTQIA+）高齢者に関する歴史と老年学における実証研究および今後の課題. 老年社会科学, **41**(1), 39-47.

田中将司 (2020). 70 代ゲイ男性のナラティブと時代背景. カウンセリング研究, **53**, 39-51.

Tornello, S.L., & Patterson, C.J. (2015). Timing of Parenthood and Experiences of Gay Fathers: A Life Course Perspective. *Journal of GLBT Family Studies*, **11**(1), 35-56.

友利幸之介・澤田辰徳・大野勘太・高橋香代子・沖田勇帆 (2020). スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版:PRISMA-ScR. 日本臨床作業療法研究, **7**, 70-76.

Troiden, R.R. (1979). Becoming homosexual: A model of gay identity acquisition. Psychiatry. *Journal for the Study of Interpersonal Processes*, **42**, 362–373.

Troiden, R.R. (1989). The formation of homosexuality identities. *Journal of Homosexuality*, **17**, 43-73.

ヨ　ヘイル (2019). DSDs：体の性のさまざまな発達の基礎知識と学校対応. 葛西真記子(編). LGBTQ+の児童・生徒・学生への支援. 誠信書房, pp.68-84.

Udis-Kessler, A. (1990). Bisexuality in an essentialist world: Toward an understanding of biphobia. In T. Geller (Ed.), Bisexuality: A reader and sourcebook (pp.51-63). Ojai, CA: Times Change Press.

U.S. Department of Health and Human Services. (2012). Healthy people 2020 objectives. (http://www.healthypeople.gov/2020/topicsobjectives2020/default.aspx).

Weststrate, N.M., & McLean, K.C. (2010). The rise and fall of gay: a cultural-historical approach to gay identity development. *Memory*, **18**(2), 225-240.

Zivony, A., & Lobel, T. (2014). The invisible stereotypes of bisexual man. *Archives of Sex Behavior*, **43**, 1165-1176.

（臨床心理学コース　博士後期課程 2 回生）

（受稿 2023 年 8 月 31 日、改稿 2023 年 11 月 20 日、受理 2023 年 12 月 22 日）

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものです。

高齢期の性的マイノリティ（LGBT）に関する アイデンティティ発達研究の概観

－欧米諸国における実証研究に関するスコーピングレビュー－

上田　裕也

近年、性的マイノリティへの関心が高まっているが、その高齢期に関する実証研究は他の発達段階に比べて限られている。本稿では高齢期の性的マイノリティのアイデンティティ発達に着目した。心理臨床実践の上で、メンタルヘルスの問題の予防やクライエントの課題へのアセスメントに有効であると考えられるためである。海外文献のスコーピングレビューを行い、これまでの知見と今後の課題を整理した結果、社会文化的・歴史的文脈の影響を重視するライフコースの観点を踏まえた研究が多くみられた。高齢期の性的マイノリティは若い世代に比べて差別や偏見の厳しい時代に青年期を送ったため、性的アイデンティティの自認やカミングアウトに慎重な傾向が示された。今後の展望として、多様性を捉えるための調査対象の拡大、過去の回想だけでなく高齢期そのものの発達過程の把握、アイデンティティ発達過程における心的過程に関する研究の必要性が挙げられた。

An Overview of Gender and Sexual Identity Developments among Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Older Adults: A Scoping Review of Empirical Studies in Western Countries

UEDA Yuya

While interest in gender and sexual minorities has increased in recent years, empirical research on their older age is relatively limited compared to other stages of development. This paper specifically focuses on the identity development of gender and sexual minorities in older age. The aim of this research is to prevent mental health problems and to better understand clients' issues in psychological clinical practice. According to a scoping review of the international literature, it was observed that many studies were based on a life course perspective that emphasizes the influence of sociocultural and historical contexts. The research showed that older gender and sexual minorities tend to be more cautious about self-identification and coming out of their identities than younger generations due to experiencing severe discrimination and prejudice during their adolescence. Future research could potentially expand the scope of the survey to encompass a more diverse range of participants, gain a more comprehensive understanding of the developmental process not only of past recollections but also of older age itself, and conduct further research on the mental processes involved in the identity development process.

キーワード：性的マイノリティ、高齢期、アイデンティティ発達

Keywords: Gender and Sexual Minority, Older adults, Identity Development